

道徳 ジャーナル

- 21世紀 心の時代に
師匠と弟子 互いが学び合える環境に
杉本昌隆……………1
- 座談会
コロナ禍の学級運営とICT活用～前編～
藤永啓吾／前田良子／杉本遼……………4
- SDGs×道徳 ……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

21世紀
心の時代に

師匠と弟子 互いが
学び合える環境に

藤井聡太に続く棋士を

藤井と最初に出会ったのは、私が幹事をして
いた東海地区の研修会です。藤井は小学一年生
で、三十人以上いる生徒の一人でした。お兄さ
んたちの中で一人だけ小っちゃくて、色白で天
然パーマで顔のふくふくとしたかわいらしい子
でした。対局で負けると将棋盤を抱え込んでギ
ャンギャン泣いていたのが印象的で、相当な負
けず嫌いであることが感じられました。

その後、藤井が小学四年生のときに「プロに
なりたい」とお母さんと一緒に挨拶に来まし
た。弟子入りの申し出を受け入れましたが、規
格外の才能でしたから、「これは大変なことを
引き受けてしまった」と責任も感じたものです。
現在の藤井の活躍に師匠として喜びを感じま

す。非常に誇らしく思っています。しかし、私
も同じプロの棋士。藤井に負けてはいただけ
ない。藤井の存在が私にとって「より強くなりた
い」という原動力にもなっています。

プロの棋士は必ずしも弟子をとらないといけ
ないわけではありません。では、なぜ私が弟子
をとるのかというと、一つは自分の師匠、故・
板谷進九段の存在があります。私自身、板谷九
段に弟子にしていたただいたおかげで現在があり
ます。師匠に受けた恩を自分が弟子に伝えてい
く……、将棋界の「恩送り」です。私が十九歳
の頃、板谷九段は四十七歳の若さで急逝されて
しまっただけにその思いが強くなります。ま
た、愛知県には在住のプロの棋士が少なく、今
でも現役棋士は私と藤井の二人しかいません。
藤井に続く棋士を地元から輩出することが私の
夢です。



将棋棋士
杉本昌隆

指導において気をつけていること

指導については、子供によってタイプが違うので個別に対応する必要性を感じています。例えば、将棋の戦法には守りの「振り飛車」と攻めの「居飛車」というのがあります。これは右利きか左利きかくらいの違いがあり、どちらが向いているかはその人によります。

私は振り飛車のタイプです。指導側としては、同じタイプの生徒ですと教えやすくはあるのですが、なまじ自分が詳しいと入れ込み過ぎる恐れがあります。答えをあまり先に言い過ぎず、その子自身で考える機会を奪わないように注意しています。

藤井は居飛車のタイプで、最初に見たとき、「そもそも発想が違うな」と感じました。あまり手を加えてはいけない才能だとも思いました。もちろんこちらでプロが好む「要領の良い勝ち方」を教えれば、短期的にはもっと早く成長することもできたでしょう。けれども、それは藤井のためにならないと考えました。子供がそれぞれにもっている個性が一番大事なので、藤井についてもそれが伸びるよう接していました。

藤井には非常に頑固な一面がありました。納

得できないことを他人から言われると黙ってしまいます。そして自分が納得できるまで考え続けます。あまりに長く考え続けるものですから、私が折れて考え直すこともありました。今の藤井は、黙るのではなく「こちらの手ではどうでしょうか」と言うようになりました。こうした頑固さは彼のすばらしい個性のひとつです。

もちろん、こちらの言うことに素直に従う弟子もかわいいのは事実です。しかし素直すぎてもやはり良くありません。分らないことがあるとすぐに人に聞き、言われたことをそのまま受け入れてしまうようになるからです。

「一回自分で考えてみよう」と言って、いい意味での頑固さが出てくるのを待つ必要があります。子供が元々もっている素質に合わせて、どう指導するべきかを日々考えています。

子供にとって大人の言葉は重いものです。私の子供の頃、ある大人に「対局中に長考するのは才能がないからだ」と何気なく言われたことがあります。当時はその言葉を真に受けて悩みました。大人側からすると、全くの無意識だけに余計に怖い。その一言を子供がどう捉えるかは、常に意識するようにしています。

また、弟子たちとの会話が一方通行にならないようにしています。師匠だからといって上から目線になり、「従わせよう」という態度でい

るのではなく、弟子たちが意見を言いやすい空気づくりを意識しています。弟子たちには入門前に「将棋盤の前では師匠も弟子もないから、思ったことを言ってほしい」と伝えています。

「学び」とは相互的なもので、片方から一方的に教わるということはないと思っています。たとえ私のほうが技術的に上であっても、弟子たちから学ぶことも多いのです。実際に、「こんな手はないですか」と小学生の子から思いがけない手を言われて「なるほど、子供の発想は柔軟だな」と感心させられることもあります。また、彼らの勝負にかける思いや一途さ、反骨心や闘争心といった部分から刺激をもらうこともあります。

私も決して今まで順調に來たわけではありません。だから伸び悩んで苦労している弟子の気持ちはよく分かります。辞めたくなることもあるでしょう。しかし、対局で負けることを悪いことだと捉えさせないよう意識しています。誰しも伸び悩む時期があります。それが当たり前で、日常であると伝えたいと思っています。

将棋で培った力を生かしてほしい

私の弟子は現在十五人ですが、辞めていった弟子も十数名ほどいます。将棋界は、奨励会に



2020年 史上最年少（17歳11か月）でタイトルを獲得した弟子の藤井棋士と

入っても八割の人がプロになれずに辞めていく
 厳しい世界です。「生存率二割」という言い方
 もされるほどです。年齢制限があり、いくらや
 る気があっても制度上辞めなければなりません。
 もちろん、中学・高校の学生生活を通してい
 ろいろなことを経験し、将棋以外の分野に魅力
 を感じて辞める子もいます。「プロにならな
 ければ成功ではない」ということでは決してあり
 ません。将棋だけが人生でもありません。

私の弟子には、iPS細胞を発見した山中伸
 弥教授のニュースに感銘を受け、「自分もその
 ような道で人を助けたい」と大学の理系の学部
 に進学した子や、「文筆業につきたい」と大学
 の文系の学部に進学した子もいます。最近も中
 学生の弟子が辞めていきました。将来を期待さ
 れる子でしたから引きとめました。最後はそ
 の子自身がそう決めました。「制度上は退会で
 あっても、君にとっては卒業だから。次の道で
 羽ばたいてほしい」と送り出しました。

辞めた弟子たちは今でも高校や大学への進学
 などの節目に連絡をくれます。前述の理系に進
 んだ子は、今は医療に役立てられる人工知能の
 研究をしているそうです。将棋の世界で彼らの
 望みをかなえてあげられなかったという苦しみ
 もありましたが、将棋で培った集中力や思考
 力、忍耐力などは今後も生かされるはずで
 す。別の分野で輝いている若い子たちを見るのは何
 よりの喜びです。

コロナ禍という思いもよらない時代になりま
 した。しかし人との出会いが難しくなった今だ
 からこそ、人とのつながりを大切にしたいと思
 うようにもなりました。インターネットを通し
 て研究会やお子さんの指導なども行っていま
 す。チャットで会話をするのですが、寡黙でお
 となしに思っていた小学生のお子さんが、実

は好奇心旺盛で色々な意見を持っていたことを
 チャットをすることで知りました。また、チャ
 ットルームからいなくなってしまう一人の弟
 子を、他のルームへ探しに行ってくれた弟子の
 面倒見の良さに感心することもありました。こ
 んなふうには弟子たちの新たな一面を見つけるこ
 とができました。

そういえば、こんなこともありました。将棋
 ではよく「咎める」という言葉を使います。相
 手のミスを見逃さないように進めることす
 が、「咎められるかな？」とチャットで聞いた
 ら、小学六年生の弟子からの返事がなかなか返
 ってこないのです。「考えているのかな」と思
 って待っていたのですが、一向に返事がありま
 せん。もう一度聞いてみたら、「何て読むのか
 分からない」と返事をされてしまいました。普
 段から口にはしていた言葉でしたが、「咎」と
 いう漢字はまだ習っておらず知らなかったよう
 です。そんなハプニングも楽しんでいきます。

いつの時代も、人と人のつながりは大事で
 す。そして子供たちは、この時代ならではの楽
 しみ方を知っています。その適応能力は子供の
 才能です。私たちが「厳しい時代だ」と嘆くの
 ではなく、子供たちと共に学びながらこれから
 の日々を送りたいものです。

（取材・文／村山尚子）

〈座談会〉

コロナ禍の学級運営とICT活用〈前編〉

山口大学教育学部附属光中学校

教諭 藤永 啓吾

東京都国分寺市立第四小学校

主任教諭 前田 良子

東京都足立区立足立小学校

教諭 杉本 遼



新型コロナウイルスの感染拡大から二年が経とうとしています。感染予防対策がなされる中での学級運営について、コロナ禍で普及が加速したICT活用について、現場の状況と共に三人の先生方からお話を伺いました。

つながりの大切さを再確認

— コロナ禍に見舞われてからの学校の様子と取り組みについて教えてください。

藤永 大人も子供も人間のぬくもりを、今まで以上に求めるようになったと思います。「人と

の距離を保ちましょう」「話してはいけません」と、物理的な距離が求められる、人との関わりが制限されるようになったことで、これまで当たり前だった「つながり」をより大事にしたいという姿がみられます。

最初の一斉休校のときの生徒たちへの対応は電話連絡でしたが、再び休校になった際に、私が学年主任を担当している中学三年生はNOO3を使った学年集会を行いました。画面越しですが、顔を合わせることができたのはとても良かったです。

リモート環境の整備に関しては、各家庭に対して事前にパソコンやタブレット端末等のハードウェア所有の有無、インターネット環境の確認等を行いました。リモート環境が整っていない家庭は約一割でしたので、学校で用意したタブレットを貸し出し、Wi-Fi環境に関しては大学から支給されたルーターを貸し出しました。

中学三年生は高校受験を控えている大事な学年です。生徒、教員にとって、大きな環境の変化に対応しなくてはならず、本当に大変でした。受験生は自分の学力を高めると共に高校の情報を集めることも必要です。ところが、ほとんどの高校のオープンスクールが中止になってしまいました。そのため、各高校の先生方に来校いただき、学校紹介をしてもらったり、学校紹



介動画を提供していただいたり、オープンスクールに代わる場をつくったりしました。

他県の学校を受験する生徒は県をまたぐ移動があったため、自宅待機で数日間登校できなかった生徒もあり、学校で面接試験の直前対策ができない場合は、リモートで模擬面接を行いました。面接官役の教員数を実際の面接と同じにするなど、できる限り本番に近い内容で準備しました。

前田 私が勤務している公立の小学校では、感染予防策として、まず分散による少人数ずつでの登校を実施しました。休校時の学習面については、全国の公立学校で利用されている教育クラウドサービス『まなびポケット』で教員が課題を提示する一方で、紙のワークシートも準備し、デジタル、アナログの両方を使って学びを進めていきました。

密になることも成長には欠かせない年代の小學生たちに「くっついてはいけない」「おしゃべりしてはいけない」と制限をかけながら、明るく子供らしく成長できるようにするにはどうすればいいか。この点が難しいと感じました。

例えば、道徳の学習のときに「困っている人がいたら助けよう」「人と積極的に関わろう」

ということを伝えたいと思っても、コロナ禍のため社会では「人と離れましょう」「話してはいけない」という注意喚起がされていて、兼ね合いがとても難しいのです。

私の学校でもコロナ禍になったばかりの頃は、リモート環境が整っていなかったため、各家庭にある端末を活用してもらい、もっていない家庭には端末を貸与するなど、順次整備をしていきました。子供よりも大人のほうが機器の扱いに慣れるのが難しかったです。研修会を開いて、熟知している先生から指導してもらうなどして慣れていきました。

杉本 私は、二年前は六年生、昨年度は一年生を担当しました。つまり、普通の卒業式、入学式ができなかった学年を担当したことになりました。クラスだけの卒業式、入学式でした。

当初予定していた四月の入学式の日は、一年生の児童は登校できない状態でした。教科書を



藤永啓吾先生
(*山口県からリモートで参加)

保護者に渡し、直接渡せない場合は郵送。児童や保護者の皆さんと顔を合わせることのないまま新学期がスタートしたのです。そこで、最初の緊急事態宣言発令中の昨年五月に、Noo3で朝の会を始めました。

リモート環境の整備については、藤永先生の学校とほぼ同じです。入学したばかりの子供たちにまず「自分たちのクラスがあること」を感じてもらいたかったので、朝の会では子供同士で名前を呼び合って健康観察を行いました。自宅から発信する自己紹介では、学校ではできないことが行えたのが新鮮でした。たとえば、柔道習っている子は柔道着を着て登場したり、兄弟姉妹を紹介したり。ほかにも、ブレイクアウトセッション(グループに分かれてディスカッションする)機能を使って休み時間に自由におしゃべりさせたりしました。

Noo3の朝の会により、一年生の小学校導入期に、学習に集中する環境をつくることができました。自然と椅子に座り、画面を見ることで話を聞き、相手に集中できます。リモートでの学習は、子供の端末の横に、時々保護者の姿を感じ、毎日授業参観のようでした。保護者と一緒に児童を育てているようで良かったです。

*実際の座談会は、マスク着用の上、ソーシャルディスタンスをとって行いました。

リモートと対面の利点を使い分ける

——ICTを活用した授業について教えてください。

藤永 初めての一斉休校が明けてから間もない時期に、リモート環境を想定して教室内でZoomを使った道徳の授業を行いました。

またいつ休校になるかわからない状況でしたので、リモート学習に慣れてもらうことが目的でした。生徒は教室にいますが、自宅にいる設定なので、教員も生徒も画面上での操作は無言で行い、コミュニケーションはチャット機能を活用することにしました。発言するのは私だけで、画面越しに私が問いかけると、生徒たちがチャットで意見を返します。生徒たちは端末の操作に慣れているので授業は円滑に進みました。タイピングスキルに差があったので、選択肢から答えられる問いを多く用意し、全員がスムーズに授業に参加できるようにしました。タイピング中に授業が進むのは、対面授業で子供の発言中に教員が次の内容に進めるのと同じなので、そうならないように配慮しました。

前田 私の学校ではタブレット端末を使った授業に今年度から取り組んでいます。東京都分寺市ではマイクロソフト社のTeamsというアプリ



前田良子先生

リを使用しています。

『手品師』で授業を行った際は、Formsというアンケート機能を使って「もし自分なら、男の子のところへ行くか、大劇場へ行くか」という発問を投げかけました。すると結果は、ほぼ半々に分かれました。

名前カードを黒板に貼らせて意思表示させていたときは結果がどちらかに偏ることが多かったので意外でした。アンケート機能は回答するとすぐ集約されて結果を見ることができますが、子供たちには、入力したら画面を閉じるように指示して、全員の入力が終わらないと結果を見られないようにしました。子供たちも、結果を見て「意外だな」と驚いていました。

振り返りの中で、「参加している感じがした」という今までは聞かれなかった感想がありました。これはICTの利点ではないかと思えます。ただし、理由などを記入させる場合、藤永先生もおっしゃったように、入力スキルに差が

あるので、紙に書かせました。現状では、ICTの機能的な面と、アナログ面の両方を使い分けて授業を行うのがよいのでは、と思います。

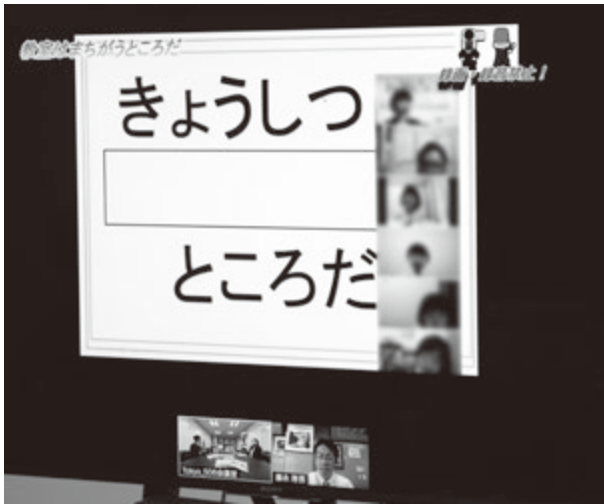
杉本 私は、毎年、年度の最初の道徳の授業では絵本の『教室はまちがうところだ』（子どもの未来社）を使っており、リモートでもこの授業に、思いきって挑戦しました。

「教室は〇〇ところだ」の〇〇に入るものを子供たちに選択肢を提示して問いかけるシンプルなものから始めました。教材「かぼちゃのつる」では、Googleフォーム（アンケート作成ソフト）やブレイクアウトセッションを使って授業しました。画面の中の子供たちにノートに書いたものを見せてもらいながら授業を進めました。このとき、私自身も在宅でしたので、後に連絡事項を書いた掲示物を用意して、教室の雰囲気が出るように工夫しました。

こうした経験から、ICTは、選択的に考えたり、ペン図を使って分析的に考えたりする活動の方が全員が参加することができるためより効果的だと感じています。

保護者とつながり、距離を埋める

——子供たちが教室にいない中、子供の様子を把握したり、円滑な学級運営を行ったりするた



リモートで行った道徳の授業。空欄部分を子供たちに問いかけた。(杉本先生)

めに必要なことは何だと思えますか。

藤永 直接子供たちと会えない状況で、子供のことを細かく理解し把握することは、正直なところ「ほとんどできない」といえます。子供たちが登校せずに家庭にいる場合、まずは家庭や地域社会に委ねます。そこまで教員が介入すると、おそらく教員たちはさらに膨大な仕事を抱えてしまいます。なので、できる範囲のことをするしかありません。では、どんなことができるか。それは、保護者とながらることです。

休校期間が明けて登校が可能になったとき、最初に行ったのが、NOO3を使った授業です。そして、NOO3による保護者の授業参観を何回



杉本遼先生

も行いました。「子供たちはこのように学んでいる」という現状や、学校の雰囲気、授業を行う教員たちの姿などを伝えました。これは、保護者の方々に安心してもらう大きなきっかけになったようです。保護者の方がお子さんのことで教員に相談したくても、学校とあらかじめつながっていなければうまくいきません。そのためのアイテムとしてICTを使うことは有効だと思えます。保護者が医療従事者であるために三者面談の会場に足を運ぶことができなかった際は、私と生徒は教室で、保護者の方は画面越しで、面談を行いました。

前田 私も保護者への対応が大切だと思えます。子供たちになかなか会えないという環境下では、保護者にはさらに会える機会が減ります。学校公開もできず、保護者が学校の様子を把握する機会が大幅に減ったので、私たちのほうから工夫して保護者とながらる機会をつくることは大事です。一方で、子供自身が発信でき

る場が必要だとも思います。直接顔を合わせれば、教師が顔色や雰囲気の変化で子供の様子がある程度把握できますが、できない場合、子供が自分の状況を気軽に素直に伝えられるように信頼関係を築くことが大切だと思います。そのためにも、使用ルールを設けることが前提ではありますが、連絡ツールの活用やシステム構築が欠かせないと感じています。

杉本 私は、電話連絡が大事だと思いました。NOO3で朝の会をスタートする前に、まず、電話で各家庭に連絡をしました。以前、藤永先生が毎年新学期が始まるときに「私が担任します。よろしくお願いします」と各家庭に電話をしているとおっしゃっていたのを聞き、私も昨年度、電話連絡から学級経営をスタートしました。これがよい結果を生んだと考えています。

昨年、私の勤務校では分散登校の終了後も緊急事態宣言下では週一日はオンライン授業でした。この授業を保護者に参観していただいたのがよかったです。クラスの状況を開示することが、保護者との信頼関係の源になったように思います。学級内の児童同士の人間関係づくりにおいても保護者ももっと共有しながら策を講じていく必要があります。学校が保護者と密接につながるためにもオンラインを有効的に活用したいと思っています。

(後編へ続く)

SDGs× 道徳

連載 第7回

●はじめに

本校校区では、小中連携や一貫教育による9年間を通したカリキュラムづくりを進めている。その中で、「地域・環境・人」をつなぐテーマとして、SDGsの視点を取り入れ、総合的な学習の時間と生活科において実践を行っている。これまで取り組んでいたテーマに、SDGsを関連させることで、子供たちの探究の深まりや、誰もが実践できる授業につなげていった。

さらに、小中連携とSDGsの視点で考えると、道徳科のもつ役割と可能性が大きいと考える。なぜなら、道徳科では今、子供たち一人ひとりがSDGsで扱う17のゴールを、他人事ではなく自分自身の課題として向き合い、考え、議論することが求められているからである。今回は、SDGs×道徳で、小中連携のカリキュラムづくりを進めていきたいという思いから授業を考案した。

●授業実践「大切にしたい生き物のいのち」

(1) 授業づくりの過程と目的

テーマは、汎用性のある道徳科授業づくりである。「いつでも・だれでも・どこでも」できる授業にしたいと考えた。本授業の汎用性としては、①1時間扱いの授業（自然愛護）、②身近な題材（社会科見学で訪れた動物園）を教材にしたことが挙げられる。①から、教育課程上、無理なく実践が可能であり、②から、全国各地にある動物園を題材に、今回取り上げたゾウ以外の動物を通して学ぶという授業展開も可能になると考えた。

また、SDGsを扱う授業の一つに「ロゴ学習」がある。しかし、低学年という発達の段階において、17のロゴの意味を理解したり、ロゴを通して理解を深めたりする授業は困難である。そこで、SDGsを掲げずに、その理念を学ぶ授業にすることを考えた。

(2) 授業の展開

【ねらい】

アジアゾウのおかれた環境を知り、生きものを大切にしようとする心情を育てる。

【展開】

①社会科見学で訪れた動物園を思い出させ、好きな生き物

SDGs実践紹介③

動物園のゾウを通して 自然愛護を考える

～ゴール15「陸の豊かさを守ろう」をテーマにして～

北海道江別市立江別第二小学校教諭 宮浦匡典

や動物との経験を想起させる。

- ②動物園に新しくやってきたアジアゾウと出会う。園長の話から、ゾウがはるばるミャンマーからやってきたことを知る。(Google Earthの活用)
- ③ゾウ使いの少年アウン君の語りを聞く。ミャンマーでは、彼らが生活を共にするゾウの数が減っていることを知る。
- ④ゾウを「動物園で大切に育てた方がよい」「ミャンマーに返した方がよい」二つの考えを提示し、意見を述べ合う。
- ⑤様々な立場から考え、自分の考えを深める。



(3) 児童の感想と考えの変容

本実践は、2年生（2019年度）と1年生（2020年度）で行った。子供たちの授業の感想を以下に記す。

〈動物の立場で考えた子〉

- ・動物が暮らしやすいところで暮らせるようになったらいいなと思った。
- ・私たちはゾウが日本に来て良かったと思っているけど、ゾウは自分が生まれた国の方が暮らしやすいのかなと思った。

〈これからの行動を考えた子〉

- ・自分の家ではいろいろ動物を飼っているけど、面倒をあまりみていなかったの、これからは大切に育てたい。
- ・動物の暮らしについて調べてみたい。

〈考えの変容が見られた子〉

- ・〇〇さんの意見を聞いて、どちらの考えも大事だと思ったので、どう考えてよいか分からなくなった。
- ・どちらの意見も大切で、両方の意見がよく分かった。



(4) 授業を行った教諭たちのインタビューから

本授業を2人の教諭に実践してもらった。その感想を以下に記す。

A教諭（教員7年目・女性）

低学年では、一度決めた意見は変わらないと思っていたが、「どちらの考えがよいですか。」の場面では、友達の発表を聞いて、意見が変わる子がいて驚いた。彼らなりに自分の考えを何とか伝えようとしていた。また、Google Earthを使って、ミャンマーからゾウがやってきた様子を見せると、「こんなに遠くから来たんだ」という気持ちが

高まったようだった。一方で、授業ではゾウへの感情移入が大きく、今の自分の生活や授業の課題に返すところが難しかった。

B教諭（教員26年目・女性）

動物園のゾウという身近な題材で子供たちがイメージしやすかった。ディベート場面は、とても反応がよく、子供なりに理由付けをして発表していた。ゾウをテーマに、今まで考えたことがない命について考え、真理に突き進むところがよかった。揺さぶりの発問を行ったが、低学年でも分かる具体的な数値などの情報や知識があれば、もう少し根拠をもって話し合いができたのではないかな。

●おわりに

低学年という発達の段階を踏まえ、SDGsを掲げないため、その理解を助ける「活動」や「しかけ」を授業に組み込む必要があった。今回は、社会科見学で訪れた動物園、アジアゾウやゾウ使いのアウン君といった子供たちに身近な事柄から、主題やSDGsに迫った。身近な教材から共感的に理解していくことが、言葉の理解を超え、「主体的・対話的で深い学び」につながる一つの方法なのではないか。

●実践のポイント

江別第二小学校の取り組みにおいて大切な視点を三つ紹介します。

一つ目は、冒頭で述べられていたように、小・中学校で一貫した学びを計画していることです。小学校では中学校、中学校では高校で生きる資質・能力を意識して学習をデザインしています。未来を見据え、何を学びの中心に置くか再考することで、目先の学力観だけではない視点から考えるきっかけとなります。今後どの地域においても、この視点は重視されることになると思います。

二つ目は、「自分事」として捉えるための仕掛けが多く用意されていることです。自分事として考えることは「集団や社会との関わり」「生命や自然、崇高なものとの関わり」といった、個々の意識や判断の軸となる心の部分を扱う上で基点となります。この実践では道徳と社会科見学を連動させた授業づくりを行っていますが、道徳で意識や心、判断力を扱い、他教科と連動した学びを考えることもできます。

三つ目は、SDGsを学ぶことを目的とせず、「変容」を軸に置いた学びをデザインしていることです。文中にもありますが、低学年でもSDGsの理念を学ぶことは可能ですし、SDGsを学ぶ目的は児童生徒の意識や行動の「変容」にあります（参照：道徳ジャーナル106号）。SDGsは「平和で持続可能な社会」の実現に向けたゴールであり、SDGs学習は、ロゴの内容を覚えることよりも、どのように生きるのかという指針を養っていく過程にあります。

昨今SDGsが浸透してきているからこそ、SDGsを学ぶことが目的となる危険性も感じています。SDGsありきで学びをつくるよりも、社会で大切にしたいことは何か、誰もが公平に選択できるような社会とはどのようなものか、また、そうでない社会はあなたにとってどのような影響があるのか、社会や周囲で起きていることを自分に引きつけることが大切です。SDGsに関心のない人はいても、SDGsに関係のない人はいません。

道徳を通して生きる指針を養いながら、どのような社会にしたいかという視点を大切に、様々な教科と日々の暮らし、未来をつなげた学びを創ってほしいと思っています。

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT） 調査・研究統括 木村大輔

*「SDGs×道徳」過去の記事は、下記HPよりご覧いただけます。

学研 学校教育ネット 道徳ジャーナル https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/others/dotoku_journal/doutokuj/

どうなるこれからの道徳授業

連載13回 オンライン授業編

とくちゃん

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生
マンガ・のはらあこ

学先生



それでは、とくちゃんによる
「授業でのオンライン活用」
のお話です

今日は皆様にオンライン
授業のメリットと可能性を
ご紹介します

オンライン授業によって
新型コロナウイルスによる
休校中にも画面上で
顔を合わせたり授業を
したりできました

そのほか、オンライン活用で
いろいろな学校、クラス、人と
つながって授業ができます

遠隔地(島)

院内学級

小中連携

海外

特別支援
学校

さらに他校の先生や保護者となげれば
オンラインで研究授業や
授業参観ができるのです！

他校の先生

授業参観

例えば自然環境に詳しい
専門家など、ゲストティーチャーに
オンラインで授業に参加して
もらうことができます

では、授業の
中ではどんな
可能性がある
でしょうか……



道徳ジャーナル111号 令和3年11月発行

発行所 株式会社学研教育みらい 発行人 甲原 洋／編集人 木村友一

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp> ●「道徳ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

9300007572

LINE 公式アカウントのお知らせ

@おんたま先生 学研教育みらい

道徳や体育・保健体育、特別支援教育、ICT教育などの最新情報の配信や、先生のお悩みを投稿できるサービスを提供しています。

友達募集集中!



QRコードをスキャンするとLINEの友達に追加されます。